

『たけくらべ』の中の「子どもたちの時間」

——信如と美登利の恋——

松原秀江

要旨

『たけくらべ』の中の「子どもたちの時間」は、吉原界隈の当時の大人（親）たちの価値観や暮らしの中にあること、また一葉の分身と思われる信如と美登利には、一葉の家族や文学に対する様々な思いのこめられていることを、古典とのかかわりの中で述べた。

キーワード…たけくらべ・子どもたちの時間・女はらから・遊仙窟・好色五人女

前田愛の「子どもたちの時間」^[1]は、名作『たけくらべ』の最も魅力的な論考の一つだと云えようか。それはいかにも、「子どもたちのまなざしをとりかえすこと」によって、「自分たちの世界の歪みを再点検し、修正することの可能性を模作しはじめ」た現代人にとつても、驚きに値する論考である。だが果して『たけくらべ』は、私たちにとつて、「二度と繰返すことのできない子供の時間」の、封じ込められた作品なのだろうか。「信如や美登利は、明治の子どもたちである」だけでなく、「かつて子供」だった「私たちの原像」なのだろうか。

確かに『たけくらべ』の子供達は、「アソビの相のもとにとらえられている」。そしてそこには、

茶番・子供みこし・幻燈・燈籠流し・錦絵・蓮華の花・智恵の板・十六むさし・きしゃごはじき・紙雛さま人形

などといった懐かしい数々の「遊びや玩具」が描かれ、「学校の課業から開放された子どもたちの自由な時間がある」。だが果してそこには、「大人の世界にくりこまれる前に、束の間の自由を愉し」む子供達が、描かれているのだろうか。

廻れば大門の見かへり、柳いと長けれど、おはぐる溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取る如く、明暮れなしの車の往来にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は広くさけれど、さりとて陽気の町と住みたる人の申き、

(傍点筆者、以下同じ)

と始まる『たけくらべ』は、先ず「住む人の多くは廓者」の大人の世界を描いて、次のように統いている。

一 一寐の風俗よそと変りて、女子の後帯きちんとせし人少なく、がらを好みて幅広の巻帯、年増はまだよし、十五六の小癩なるが、酸漿ふくんで此姿はと目をふさぐ人もあるべし、所がら是非もなや、作日河岸店に何紫の源氏名耳に残れど、けふは地廻りの吉と手馴れぬ焼鳥の夜店を出して、身代た、き骨になれば古栗への内儀姿、どこやら素人よりは見よげに覚えて、これに染まらぬ子供もなし、秋は九月仁和賀の頃の大路を見給へ、さりとて宜くも学びし露八が物真似、榮喜が処作、孟子の母やおどろかん上達の速やかさ、うまいと褒められて今宵も一廻りと生意気は七つ八つよりつりて、やがては肩に置手ぬぐひ、鼻歌のそり節、十五の少年がませかた恐ろし、学校の唱歌にもぎつちよんちよんちよんと拍子を取りて、運動会に木ゆり音頭もなしかねまじき風情、さらでも教育はむづかしきに(中略)

入谷ぢかくに育英舎とて、私立なれども生徒の数は千人近く、(中略) 通ふ小供の数々に或は火消鷹人足、おとつさんは刎橋の番屋に居るよと習はずして知る其道のかしこさ、(中略) 三百といふ代言の子もあるべし、お前の父さんは馬だねえと言われて、名のりや愁らき子心にも顔あからめるしほらしさ、出入りの貸座敷の秘蔵息子寮住居に華族さまを気取りて、ふさ付き帽子面もちゆたかに洋服かるかゝと花々敷を、坊ちゃん坊ちゃんとして此子の追従するもをかし、⁽²⁾ などと。

そこに描かれるのは、「大人の世界にくりこまれ」、浸蝕されながらも、健気に生きる子供たちの姿である。明治二十六年、わずか二十一年の一人の女・樋口なつが、生活にゆきづまり、老いた母や妹をつれ、下谷区(現台東区)龍泉寺町に転居、「乞食相手の荒物屋」、というより「小さな雑貨駄菓子店」を開いた時、見たのは、子供を守る気力も余裕もない親のもとに生まれて、意地を張りながら、それでも無邪気に、精一杯生きる健気な子供たちだったのでなかるうか。「たけくらべ」の筆屋は、一葉の店の「右筋向い」にあり、たこやこまを売り、かたわら筆を作っていたことから、「筆屋」と呼ばれた「柏屋」がモデルのようだが、一葉姉妹は、二軒もの同業者が店をたたむ(塵中日記 明治二六・一〇・九 程、近所の子供たちに人気があり、「柏屋と共に、この荒物屋は子供たちのよい遊び場で」、「殊に雨の日は」、子供たちで埋っていたことを思えば、この筆屋の女房には、一葉その人が重なっていると思われる。彼女はまた、丸山福山町に転居すると、「銘酒屋」の「無筆の女たちのために客寄せの恋文」の代筆までしていたのだから。そして何よりも筆一本で、「此よを清く」生きたい(塵の中 明治廿六年七月)と願う女だったから。

二

先ず三五郎から見えていこう。というのも彼はしばしば、

- ・さりとはをかしく罪のなき子なり、
- ・罪のない子は横町の三五郎なり、

『たけくらべ』の中の「子どもたちの時間」

などと記され、作者・一葉が、深く心を寄せる子供だと、思われるからである。

彼は横ぶとりで背丈も低く、頭の形は才槌、首は短かく出額ででがねの獅子鼻、色も黒いが、目つきは何処までもおどけて、目かくしの福笑いを
見るような眉も、笑いの対象になり、「滑稽者」とも「反齒そつばの三五郎」とも云われて、憎む者のない十六歳の少年である。彼を頭に六人も
の子をもつ親は、轆棒かぢにすがる車引き、貧乏は底をつき、子供たちが分かれて争う二つの町の一方の表町の田中屋から、高利の金を借りて、
それが命綱いのづなになり、

三公さんこう己おのれれが町に遊びに来い

と、三歳も年下の正太しょうた（田中屋の正太郎）に云われても、「嫌いやや」とは云えない子供である。にもかかわらず、その敵の「横町に生まれて横町
に育ち」、住む土地は龍華寺のもの、家主も長吉の親。従って表向きは横町に組して、内々は表町の用も足す「二夕股野郎」に、成り下がっ
ている。

ところで「たけくらべ」は、「大音寺前の子供達の群像を、夏から初冬への季節の移ろいの中で、抒情豊かに、しかし一方に厳きびしい社会認
識を備えつつ」描いた作品だと云われている。⁽⁶⁾そしてその夏の場面は、八月廿日の千束神社の祭になっている。「祭礼まつりは別もの」、即ち日常
とは異なる非日常の異次元の世界ではあっても、それが「ままならぬ」浮世のことであるなら、またと云うより、美登利が金持の子の正太に、
「お前の祭の姿は大層よく似合あって浦山うらやましかつた」と云っているように、「山車屋台に町々の見得」をはるその時の晴れの衣裳に比例して、も
つと厳しく日常の延長線へんげんせん上にあると云ってよい。しかも年に一度のこの祭は、最も典型的な西欧の実験場だった東京の、明治二十六年とい
う急激な都市化の中で、「半農村的な景観がしだいに失われようとする」大音寺前の住民にとつて、「吉原の神、金銭の神として君臨する大
鳥大明神の呪縛から解き放たれ、眠っていたムラの記憶」の蘇る祭まつりだった。⁽⁷⁾そしてそれがそのまま子供たちの世界に持ち込まれる。

作者は先ず、

聞かぢりに子供とて由断ゆたのなりがたき此あたりのなればそろひの裕衣ゆかひは言はでものこと、銘々に申合せて生意気のありたけ、聞かば胆
もつぶれぬべし、

と記して、横町組の子供大将・長吉の紹介で、この場面は始まってゆく。彼は父親の代理で、吉原の秋の俄の先導役を勤めてから、気位が

「悉らく成り」、「心一ぱいに我がままを通して其身に合わぬ幅」も広げ、

あれが頭の子でなくば

と、鳶人足の女房に蔭口を叩かれる「わからずや」の「野蛮漢」として、描かれている。そして「町内一の財産家」の息子で、三つも年下の正太を、三五郎と同じ十六にもなる長吉が、「当の敵」にして、嫌がる信如を味方にし、正太や美登利の遊ぶ筆屋になぐり込むのである。信如が承知したのも、暴れ込む時振り廻す万燈に、町名などが記されているように、

長吉は我が門前にて産声を揚げしもの

と、長吉を「蟲貞」にする大和尚夫婦の言葉が、まぎれもない「地縁の論理」だったにせよ、それが信如の両親の言葉だったことに、深くかわっているだろう、

だが、なぐり込んだ筆屋に正太はおらず、裏切り者の三五郎が標的になり、「たゞき殺せ」「やつて仕舞え」の乱暴狼藉になってしまふ。それを見て「くやくしく止める人」も「搔きのけ」、「此処は私しが遊び処」とおどり出た美登利（十四歳）は、

何を女郎め（中略）、姉の跡つぎの乞食奴、

と侮られて泥草履を投げ付けられ、それが額際に「した、か」に当り、「血相かへて」立ち上がると、美登利は筆屋の女房に抱き止められるが、悪口雑言の末投げ出された三五郎は、馳け付けた巡査の前で、

口惜しいくやしい口惜しい口惜しい、長吉め文次め丑松め、なぜ己れを殺さぬ、殺さぬか、己れも三五郎だ唯死ぬものか、幽霊になつても取殺すぞ、覚えて居る長吉め

と、「湯玉のやうな涕」をはらくごぼし、「大声」で「わつと泣き出」したにもかかわらず、送ろうと手を取られると、

一人で帰ります（中略）、喧嘩をしたといふと親父さんに叱られます、長吉と喧嘩したと聞いては猶々叱られます、頭の家は大家さんで御座りますから

と「濁れ」、「小さく」なって「ちぢみ」上がり、横町の角で巡査の手を振切つて、「一目散に逃げ」てしまうのである。

というのも、三五郎の父親は、「お辞義の鉄」と云われ、「目上の人に頭をあげたことなく」、「廓内の旦那」は勿論、「大屋様地ぬし様」

の「御無理も御尤と受ける質」で、「長吉と喧嘩してこれくの乱暴」にあつたなどと訴えたところで、

大屋さんの息子さんでは無いか、此方に理があるうが先方が悪かろうが喧嘩の相手になるといふ事はない、謝罪て来い謝罪て来い途方もない奴だ

と叱られ、「あやまりに遣られる事必定」だからである。

その上更に、「思ふさま擲かれて蹴られ」、二・三日は立居も苦しかったにもかかわらず、「口惜しさを噛みつぶして七日十日と」たつうちに、「痛みの場処」も直ると、「その恨めしさも」いつか忘れて、三五郎は頭の家、の赤ん坊の守をし、わずか「二銭」の駄賃が嬉しく、

ねんくよ、おころりよ、

と脊負い歩き、表町へものこくと出かけて来る。そんな三五郎を、年下の美登利と正太は「捌りもの」にして、

お前は性根を何処へ置いて来た

とからかうが、決して「遊びの中間」外れにはしないのである。

そして作者も、

罪のない子は横町の三五郎なり

と記している。それは又同時に、筆屋の女房の心の内でもあつたらう。

三

というのも、長吉が信如を味方にしようと、

一昨年はそのね、お前も知つてる通り筆屋の店へ表町の若衆が寄合て茶番か何かやつたらう、あの時己れが見に行つたら、横丁は横丁の趣向がありませうなんて、おつな事を言やがつて、正太ばかり客にしたのも胸にあるわな、

と除け者にされた僻みを訴えるように、「弱い者」いじめもし、意地を通して、「破れかぶれに暴れ」、「元来愛敬のな」い長吉は、筆屋に嫌

われ、

・表町に田中やの正太郎とて（中略）、家に金あり、身に愛敬あれば人も憎くまぬ当の敵あり、
・一つ一つに取立て、は美人の鑑に遠けれど、物いふ声の細く清しき、人を見る目の愛敬あふれて、身のこなしの活々たるは快き物なり、（中略）大黒屋の美登利とて生国は紀州、言葉のいさ、か訛れるもか愛く、第一は切れ離れよき気象を喜ばぬ人なし、
・面を見れば出額の獅子鼻、反歯の三五郎といふ仇名おもふべし、色は論なく黒きに感心なは目つき何処までもおどけて両の頬に笑く、
の愛敬、目かくしの福わらひ見るやうな眉のつき方も、さりとはをかしく罪のなき子なり、
などと記されるように、筆屋に寄合う正太や美登利同様に三五郎も、「愛敬」のある子供として描かれ、作者に愛され見守られているからである。

そしてその「愛敬」とは、右に引用した文の傍点部分や、信如の、

元来愛敬のなき長吉なれば心から味方につくものも無き憐れさ、

といった言葉、及び正太についての次の文、

・人好きのするは金持の息子さんに珍らしい愛敬。

・田中の正太は可愛らしい眼をぐるぐると動かして、

を見るまでもなく、人を引き付けて思わず「味方」にし、幸せな気分させる可愛らしさと、云つてよいだろう。のみならずこの言葉には、人としての優れた美点である優しさや思いやりも、含まれているように思われる。

美登利が、長吉ら横町組の者に、「撃つやら蹴るやら」したい放題にされる三五郎を見かね、彼が年上であるにもかかわらず、「三ちゃんに何の咎がある」「意趣があらば私をお撃ち、相手には私になる」と、女だてらに飛び出し、罵られ泥草履まで投げ付けられたことは、既に見たのみならず彼女は、その場に居なかつたことを、「我が罪のやうに平あやまりに謝罪」する正太を、

何負傷をするほどでは無い、

と「につこり」笑ってかばい、その上更に、

『たけくらべ』の中の「子どもたちの時間」

夫れだが正さん誰れが聞いても私が長吉に草履を投げられたと言つてはいけな^いよ、もし万^一お母さんが聞きでもすると私が叱^かられるから、親でさへ頭^{ごう}に手はあげぬものを、長吉づれが草履の泥を額にぬられては、踏^ふまれたも同じだから

と顔を背けている。親が聞いたら、「私が叱^かられる」というこの発想は、何と三五郎に似ているのだろう。ほとんどそっくりそのままだ。勿論三五郎とは違い、「長吉づれ」と言い切る美登利には、姉の「全盛」の「威光」で、遣手や新造が「恩」もきせず、「世辞」でくれる金を、有難いとも思わず撒き散らす、「子供中間の女王様」としてのプライドがあるだろう。だからこそ、洗つても消えない「額の泥」の「恥辱」は、「身にしみて」悔しく、祭の翌日、子供たちと顔を合わせずにはおれない「学校」が、「嫌や」なのである。だが、朝飯も進まない美登利に、太郎稻荷への朝参りは、「母さんが代理」ですると云えば、

いゑく、姉^いさんの繁昌^いするやうにと私^いが願^いを懸^いけたのなれば、参らねば気がすまぬ、お賽銭下され行つて来ます

と出かけるように、美登利には自慢の姉の「父母への孝養」が、誇らしく、また未定稿に、「姉さんに孝行を先へ取られた。我れとても心は誰におとるべき」とあるように、「うらやまし」いのである。中島歌子の歌塾・萩の舎で、田中みの子や一葉とともに、「平民組」の一人だった田辺夏子が、一葉が

大音寺前に住んでゐた時「あの邊りでは玉のやうな性質の女の子が吉原で全盛になるのが、一番の親孝行だと思ふてゐるのよ」と感慨深かさうに、言ふてゐました。

と述べ、更に、

「たけくらべ」を讀んだ時、それが縁^いでは無いかと思ひました。

と記しているのを見るまでもないだろう。だからこそ祭の夕暮、筆屋に出かける美登利を鏡に映して、母親が「手づからそ、け髪」をつくり、「我子ながら」美しいと見とれ、「立ちて見、居て見」、首筋の化粧が薄かったと、「猶」も云わずにはおれない程、親の大事がりいくしむ我が身を、頭とはいつてもたかが人足の子の、誰も本気で相手にしない「わからずや」の「長吉づれ」に、「踏まれ」てなるものと云うのだろう。「なぜ己れを殺さぬ、殺さぬか」「幽霊になつても取殺すぞ」と、命も的に悔し涙を流し泣き喚いた三五郎が、親に知られると思ふや否や、ひるんで逃げ出してしまうのも、「六人もの子」をもち、貧乏も「底」をついてしまった親への、不器用な三五郎の言葉

にならない思いやりからでもあったらう。

そしてそんな三五郎の「愛敬」は「笑くほ」に、美登利の場合は「人を見る目」に具体的に記されるが、自然にどことなく「身」にそうした描かれる正太の場合、その想いはもつと複雑で深いようだ。

正太は三歳の折母に死なれ、父親も田舎の実家に帰り、老いて目の悪い祖母との「二人」暮しである。美登利の「機嫌」を直すため正太が、「祖母さん」が留守で淋しいから、一緒に見ようよ、「お寄りな」と誘った「錦絵」が、鉢木清方が『こしかたの記』⁽⁸⁾で、

江戸から續いて東京に住む家庭には、あづま錦繪や繪本のたくひがたいいのところには残つてゐた。況して相當の暮らしをした舊家には色刷の表紙もまだ美しく、舐に入れたり、桐の本箱に収めたりして、昔の持主がどんなにそれを愛蔵してゐたか、偲ばれて床しいものがあつた。

と記す通りのものであるなら、長吉が、

質屋くずれの高利貸

と罵る正太の家は、以前「相當の暮らしをした舊家」だったのかもしれない。正太は美登利に、昔の大きな「羽子板」を見せ、母親が「お邸に奉公して」いた頃、「いたゝいたゝ」ものだとも云っている。女が独り遣り、今は「六十四」にもなつて、その「いやらしさ」を、

白粉を付けぬがめつけもの（中略）（若づくりの、筆者注）丸髻の大きさ、猫なで声して人の死ぬをも構はず、大方臨終は金と情死なざるやら

と噂され蔑られる「田中屋」の夫婦は、かつてその強欲から、入婿で赤の他人の父親を、母親（娘）の死後離縁にしてしまったのだろうか。いくら金が有るとつて（中略）何たら様だ、彼んな奴を生かしておくより擲きころすが世間のためだ、

と後継の正太を罵る長吉の憎まれ口は、老いた「田中屋の後家」に対する世間一般のものでもあつたらう。目の悪い彼女に代り、二年前から「日がけの集めに廻る」十三歳の正太は、

通新町や何かに随分可愛想なのがあるから、嘸お祖母さんを悪く言ふだろふ、

と「涕」ぐんでもいる。一葉その人にも、金貸もした父・則義の貸し遣した金を、気の毒で集めきれない時があつたようだが、そんな正太

の心根が、三五郎をかばい、「中間」「外れ」にもしないのだと思われる。

しかもそれだけではない。「年老に子供だから」と、「馬鹿にして思ふやうには働いて呉れぬと祖母さんが言つて居た」ことを思い出し、己れがもう少し大人になると質屋を出さして、昔しの通りでなくとも田中屋の看板をかけると楽しみにして居るよ、他所の人は祖母さんを吝だと云ふけれど、己れの為に儉約して呉れるのだから気の毒でならない、

と美登利に訴えてもいる。そして「母さんが生きて居ると宜いが」と云い、

お前が姉であつたら己れは何様に肩身が広かろう、

と云わずにおれない正太にとつて、「美しくしい」美登利は十四歳でも、亡き母に代わる「姉」のような存在、憧れの対象だった。「夕化粧」の長びく美登利を待つて、筆屋の店先で、「待つまの徒然に忍ぶ恋路を小声」で唄う正太が、内儀から「あれ油断がならぬ」と笑われ、「何がなしに耳の根」を「あかく」するのは、その最もわかりやすい例だろう。

四

だが、美登利と正太とでは、その性根も生き方も表と裏のように違っている。たとえば「表町の通り」の、寝ぼけ顔の「朝がえり」の客もいなくなつた時間帯での一件を見てみよう。よか／＼館屋や軽業師、人形つかいに大神楽、住吉踊りなどの芸人が、年寄や子供と共に、わずかな「得分」(もうけ)を求めて、「時」にする万年町や山伏町などの、貧民街から繰り出した時のことである。筆屋の内儀のふとした言葉を聞きつけ、美登利がその群に「馳けよつて」、女太夫の「袂にすがり」何か投げ入れ、「好みの明烏をさらりと唄わせて」、

あれが小供の処業か

と、寄り集まつた人に舌を巻かせ、正太に、自分が「粹であること」の「あかし」に、

通るほどの芸人を此処にせき止めて、三味の音、ふ糸の音、太鼓の音、うたせて舞はせて人の為ぬ事して見たい

とささやくと、正太は驚き「惘れ」、

己らは嫌やだな。

と咄嗟に返している。この違いは、自らの境遇をよく知っているか否かによつてはなかるうか。正太の場合は既に見た。

美登利は、そもそも紀州生れの「よそ者」である。それは祭の日、「見馴れぬ扮粧」で「群を離れ」、「馬鹿ばやしの間」にも入らなかつた正太に相似だろう。美登利も、その姿が「誰れのよりも美しく見えた」と褒めてゐる。だが美登利は、姉の大巻が身売りの時、「鑑定」に來た「樓の主」の「誘ひにまかせ」此地に來て、「遊女の仕立物」をする母親や、「小格子の書記」に成つた父親に甘やかされ、初めは襦袢にかける半襟を袷にかけて、「田舎者もの田舎ものと町内の娘共に笑はれ」、口惜しがつて三日三晩泣き続けたにもかかわらず、今は「我れ」から人を嘲り、「野暮な姿」と遠慮のない「悪まれに口」を叩いている。美登利という禿に多い名も、いつ誰が付けたのだろう。やがて「彼の子も華魁になるのでは可愛さうだ」と呻かなければならない正太も、美登利に、

廓内の大巻さんよりも奇麗だと皆がいふよ、

と云つてゐる。柿色に大柄の「蝶鳥を染めた」浴衣を着て、「黒襦子と染分絞りの昼夜帯胸だかに」、この辺りでも余り「見かけぬ」高い「塗り木履」をはき、「白々と美しい」「首筋」に、手拭をさげた「朝湯」帰りの美登利の「立姿」を、「廓がへりの若者」は、三年後に見たいと云つてゐる。そんな美登利の將來を見込んで、樓の主が大切に、「姉様の威光」でちやほやされ、「御出世」は女に限る界限に生きて、男もさ程「怖」くも「恐ろし」くもなく、女郎を卑しい勤めとも思わず、「お職を徹す姉」の「憂いの愁い」も知らない美登利は、「好いた好かぬの客のうわさ」の中で、「派手は美事に、かなはぬは見すばらし」と思い込み、「負けじ」魂のままに、人にひけをとらじと「おもしろ」おかしく過している。そんな美登利が、「修身」や「家政学」は、「学校」で学ぶしかなく、かわらず、「わからずや」の長吉に辱められ、「我ま、の本性」を「あなどられ」た「口惜しさ」から、「石筆を折り墨をすて、書物も十露盤も入らぬものにして」、学校に行かず、仲のよい友達と「埒もなく」遊び暮していることは、ここで見逃してはならないだろう。

というのも、正太も信如も、美登利や長吉と違い、「をとなし」い「学問」のできる子供として、描かれているからである。のみならず、正太や信如について、次のような言辞のあることに、注目してみよう。

①力を言は、我が方がつよけれど、田中屋が柔和ぶりにごまかされて、一つは学問が出来おるを恐れ、我が横町組の太郎吉、三五郎など、

『たけくらべ』の中の「子どもたちの時間」

内々彼方がたに成たるも口惜し、

②龍華寺の真如とて、(中略) 発心は腹からか、坊は親ゆづりの勉強ものあり、性来をとなしきを友達いぶせく思ひて、さまぐの悪戯をしかけ、猫の死骸を縄にくりてお役目なれば引導をたのみますと投げつけし事も有りしが、それは昔、今は校内一人の仮に悔りての処業はなかりき、

③お前(信如、筆者注)は何も為ないで宜いから唯横町の組だといふ名で、威張つてさへ呉れると豪気に人氣がつくからね、己れは此様な無学漢だのにお前は学が出来るからね、何ふの奴は漢語か何かで冷語でも言つたら、此方も漢語で仕かへしておくれ、あ、好い心持ださつぱりしたお前が承知してくれ、ば最う千人力だ、

④長吉のわからずやは誰れも知る乱暴の上なしなれど、真如の尻押なくは彼れ程思ひ切りて表町を暴し得じ、人前をば物識らしく温順に作りて、陰に廻りて機関の糸を引しは藤本の仕業に極りぬ、よし級は上にせよ、学は出来るにせよ、龍華寺さまの若旦那にせよ、大黒屋のみどり紙一枚のお世話に預からぬ物を、あのやうに乞食呼はりして貰ふ恩はなし、

①③は長吉の、②は作者の、そして④は美登利の言葉である。これらに共通して云えるのは、「心から味方につくものも」無い長吉が、自らを「無学漢」と云っているように、一も二もなく子供たちを束ねることができるのは、力でも金でも家柄でもなく、「学が出来る」、即ち「物識」で「学問が出来」ということ、それも「校内」の「勉強」家にもなれば、「千人力」で「人氣」が付き、「悔」る者は誰もいないというのである。

このことは勿論、明治二十三年(「たけくらべ」は明治二十八年刊)、小学校令が改定され、教育勅語が發布されて、子供たちの義務教育が国家的事業になったことと、無関係ではないに違いない。

・我れは私立の学校へ通ひしを、先は公立なりとて同じ唱歌も本家のやうな顔をしおる、

・本家本元の唱歌だなんて威張りおる正太郎を取ちめて呉れないか、我れが私立の寮ぼけ生徒といはれ、ば、お前の事も同然だから、と長吉が信如に訴えているように、国家直属の公立学校に「エリート的色彩」が強く、子供たちの通う「学校」にも、序留意識があり、それが「反目」の一つになっていたことも確かだろう。だが、「学校の唱歌にもぎつつ、ちよんちよんと拍子を取り」、「運動会に木やり音頭も」

しかねない吉原界限の子供たちにとって、そもそも「山の手」と「下町」の区別もなく、⁽¹⁾今現に住む世界がすべてで、慶応二年前島密が、將軍・慶喜に建白した「漢字御廢止之儀」に始まる漢字廢止論や、それに続く節減論・制限論、かな専用論、ローマ字専用論など、⁽¹⁰⁾読んだことは勿論、聞いたこともなかったに違いない。のみならず明治二十年前後活発だった仮名専用論も、二十四年以後は衰え、たとえば、

北「弥次さんおめへ讀んでくんねへおいらにやア四角ばった字があると蹴つまづいてよみにくいからヨ」
(西洋道中膝栗毛八編下)

などと云われるように、時代は明治でも江戸時代以来の、というより、文字のない日本に漢字・漢文が伝わり、漢籍で学問がなされて以来、学問は本来、「四角ばった」漢字・漢語を知らなければ、覗けないエリートの世界だった。そしてこの並々ならぬ努力の必要な漢字の世界は、信如や正太を、「無学漢」の「我ま、の本性」を押さえた「温順」で、「柔和」い少年にしていたと思われる。静かな「思いやりのある」の語を、つけ加えてもよいだろうか。

五

だが、既に見たように、

元來愛敬のない長吉なれば心から味方につくものも無き憐れさ、

と、心ならずも長吉に「組」する信如は、正太や美登利、三五郎とは違い、長吉同様「愛敬」のない人間だと、美登利に思われている。が信如は、親の威を借りて暴れ者を集め、「弱い者いじめ」をする長吉のような子供ではない。美登利たちに対する「長吉の乱暴」を、「今更」のように驚きながら、あえて「叱り」飛ばしめせず、再び喧嘩のないようにと祈るその「をとなし」さは、うじうじと「いぶせく」、「校内一」の「物識」でなければ、いたずら坊主が、「さまざまの悪戯をしかけ」ずにはいられない体のもだったろう。そしてそんな信如の性格にも、親の生き方が深くかかわっている。

先ず彼の父親は、龍華寺の「さばけた」大和尚である。「腹」は「身代と共に肥へ、太り」、「貸金の取たて」、「帳面くるやら経よむやら」、「大盆に泡盛をなみく」と注がせて、さかなは好物の蒲焼」といった有様だった。のみならず、その和尚に二十も違い、四十も越えた母親も、

『たけくらべ』の中の「子どもたちの時間」

「もとは檀家の一人」だが、「良人を失なひ」寄る辺ない身を寺に寄せて、「お針」や洗濯、「お菜ごしらへ」など小まめにするうちに、「経濟」より割出した和尚の「不憫」が掛り、総領の花ができて、「表向きのもの」になった女である。何もかも掻き集める「熊手」の内職もしかねない和尚が、西の市に門前で簪の店を出させると、欲につられていつしか恥かしいのも忘れ、思わず声高に「負けましよ負けましよ」と人の跡を追うまでに成り下がっている。そして「皮薄の二重腮」が愛らしい姉の花も、素人にして置くのは「惜しい」と、賑やかな田町の通りに葉茶屋を「しつらえ」、帳場格子の内に座らせて、その「愛敬」を売らせている。

「元来一腹一对」の親のもとに生まれ、他人もいない穏やかな「家の内」に育って、特別信如を「陰気もの」にする理由もないのだが、「発心は腹から」の「物識」の信如にとつて、こんな「父が仕業も母の処作も姉の教育も、悉皆あやまり」のように思われ、たとえ檀家の人間が聞かなくても、近所の人の思わくが気になり、子供仲間の噂にも、

龍華寺では簪の店を出して信さんが母さんの狂気顔して売つて居た

などと云われはしないかと恥かしく、「我親ながら」そのすることなすこと、すべてが「浅ましく」「恨めしく」、部屋にとど籠つて、人「面」を合わすことのできない「生煮えの餅」のような「に急肝」、「臆病至極の身」になっている。従つてそんな信如にとつて、将来「華魁」になるはずの美登利と、噂になるなど、「我慢」のならない、もつての外のことだつたらう。

にもかかわらず、春の運動会で思いも寄らずつまづいて、泥だらけになり、見かねた大黒屋の美登利に介抱されて、友達の中の「嫉妬や」

藤本は坊主のくせに女と話をして、嬉しさに礼をいつたは可笑しいではないか、大方美登利さんは藤本の女房になるのであろう、お寺の女房なら大黒さまと云ふのだ

とからかわれて以来、「美登利といふ名」を聞くのも「恐ろしく」、もやくくと「厭やな気持」になり、問われても「碌な返事」もせず、「傍へ寄れば「逃げ」、話しかけると咄嗟に「怒り」出したりもする。そしてそんなことが度重なると、「藤本さん藤本さん」と、親し気に言い掛けている美登利も、「愛敬」のない人と「惘れ」るだけでなく、やがて「疝」にさわって、「故意の意地わる」のように腹を立て、摺れ違つても物も云わず、挨拶もせず、「卑怯」な長吉の「わからずや」に、「乞食呼はり」されたのも、「物識」をかさにきた家柄のいい、「籠

華寺さまの若旦那、信如の「陰に廻」った「尻押」と、以来二人が通っていた育英社にも、行かずじまいになってしまふのである。

にもかかわらず、たとえば西鶴が、「みなくかはるならひぞかし」(好色二代女二の二)などと云うように、この二人のいらだちも恋に変わってゆく。というより、山田詠美の『ひよこの眼』⁽¹²⁾の重紀と幹生の恋が、「まったく動じない」幹生の「懐しい」「澄んだ瞳」が気になって、重紀が幹生を見つめ続け、それがクラスの男子生徒の「悪い冗談」になり、「無責任」な笑いになって始まるように、特に思春期の子供たちにとって、見つめ見つめられること、周りを気にして意識し過ることが、恋になり、愛し愛されることになるのだろうか。だが、幹生と重紀の場合とは違い、正面から向き合うことのない美登利と信如の幼い恋は、大人の生活や価値観に呑み込まれた子供たちの意地の張り合いや争いの中で、お互いがお互いの心に向き合うこともなく、終わってしまう。

それは先ず、夏も終わり、赤とんぼが飛びかい、俊成が和歌に詠んで遺し伝えたあの「鶉のなく頃も近づき」、「朝夕の秋風」も「身にしみ」わたる「荒涼とした」秋の日の出来事として語られる。その前後に、祭の夜の傷も癒ると、その時のくやしさも忘れ、

ねんくよ、おころりよ、

と「頭の家」の子を「脊負ひあるく」三五郎の「罪のない」姿や、

開いらいた開いらいた何の花ひらいた

と、「無心」に遊ぶ子供たちの姿の記されていることも、見逃してはならないだろう。

そしてそれは時間を限れば、「秋雨」が「しとくと降るかと思へば」、「さつと音」を立てて運んでくる様な「さびしい」「夜」のことだった。筆屋で三人の小さな子供たちと、「きしやご弾き」などの「幼なげな」遊びをしていた美登利が、「不図耳をたて」、「誰れか中間が来たのではないかと嬉しが」り、潜り戸を開けてみた正太に、「一件(信如)だもの」「呼んだつても来はしないよ」と云われ、「信さんかへ」と咄嗟に答えて、「嫌やな坊主つたら無い」、「私たちが居る物だから立聞きをして帰つたのであらう」と散々の、しつた拳句、「どれ(中略)一寸見てやる」と出て行って見たのは、美登利が更に、

家の母さんが言ふて居たつけ、瓦落くして居る者は心が好いのだと、夫れだからくすくして居る信さん何かは心が悪いに相違ない、と、母親の言葉まで引合に、「口を極めて」罵り続ける信如の後姿だった。

軒の雨だれ前髪に落ちて、おゝ気味が悪いと首を縮めながら、四五軒先の瓦斯燈の下を大黒傘肩にして、少しうつむいて居るらしくとぼと歩む信如の後かげ、何時までも、何時までも、何時までも見送るに、美登利さん何うしたの、と正太は怪しがりて背中をつゝきぬ。

と作者は記している。

六

そしてこの作品のクライマックスである大黒屋の寮の前の場面でも、真如はその背後から美登利に見つめられている。通らなくてもよかつたにもかかわらず、「近路」だからという理由で、また姉の頼みの長胴着を、季節柄一刻も早く届けたいという親心をくんで、名前を聞くのも「恐ろしく」「厭や」だったはずの美登利のいる大黒屋の寮の前の道を選ぶ信如には、無意識だったにせよ、ひよつとしたらという美登利への想いがあつたのではなからうか。それは、この章(十二)の冒頭部分が、

近路の土手々に、仮初の格子門、のぞけば鞍馬の石燈籠に萩の袖がきしをらしう見えて、椽先に卷たる簾のさまも懐かしう、中がらすの障子のうちには今様の按摩の後室が珠数を爪ぐつて、冠つ切りの若むらさきも立出るやと思はるゝ、其一ト構へが大黒屋の寮なり。などと記されるように、『源氏物語』若紫の巻を踏まえ、若紫が美登利に照応することからも、明らかだと思われる。だがこの部分に、若紫の巻の「小柴垣」に対応する「萩の袖がき」があるにもかかわらず、『たけくらべ』の語り手と信如の視点、まなざしは、光源氏とその物語の語り手のように、必ずしも重ならない。というよりつまり十六歳の信如は、光源氏とわずか二歳の違いであっても、勿論思春期の二歳の違いは大きいにせよ、育つた環境の余りの違いから、美登利の後姿を、その「まなざしによつて捉え」るところか、垣間見ることさえないのである。

若紫の巻の季節は「三月のつごもり」、山の桜の見事な晩春だった。原岡文子は、その「晩春の午後の日長の物憂さ」が、加持祈禱によつて、「病も取り鎮められた」安堵感とも相俟つて、「夕暮れの霞」とともに、「物憂い吐息のように」色好みの光源氏を包み、「垣間見へと誘

う」と述べている。⁽¹³⁾そしてまた『源氏物語』には、女三の宮と柏木の罪の子・薫が、「晩秋の霧のまぎれ」に、「簾を短く捲き上げ」、月をながめる宇治八の宮の娘、大君と中君を垣間見、見る場面のあることも、同一線上のこととして指摘している。⁽¹³⁾師の歌子がその人柄と歌才を認め、かつては養女（後継者）にもと望み、後には萩の舎の助教にもなる一葉は勿論、江戸時代はおろか中世から、歌よみには欠かせない歌書の一つとされてきた『源氏物語』⁽¹⁴⁾のこれらの場面は知っていただろう。事実萩の舎では、「源氏物語など古典の講義も」⁽¹⁵⁾していたのであり、日記によれば、助教になる丸山福山町時代一葉は、後に東京女子大の学長にもなる安井哲子をはじめ、女子高等師範学校（お茶の水女子大の前身）の附属小学校などに在職する人たちに、自宅で源氏物語など講じてもいる。それ程に熟知した『源氏物語』の罪の子・薫の宇治（憂）の物語の晩秋の霧の夜を、更に初冬の時雨時に変え、原岡文子の云うように、一葉はこの場面を、

大黒屋の寮に住む美登利が、「雨の中の傘なし」であるばかりか鼻緒を切つて困惑する信如を垣間見、布きれを手に出る構図⁽¹³⁾に置き換える。

のみならずこの場面について、鷗外が『三人冗語』⁽¹⁶⁾の「たけくらべ」の評で、
お七が吉三のとげをぬきてやる前人の藍本もあるべく、

などと云っていることは、改めて指摘するまでもないだろう。幼い頃から本郷界隈を転々とし、信如のモデルは、父・則義がまだ生きていて、「経済的に最も豊か」⁽¹⁷⁾だった本郷六丁目五番屋敷時代の初恋の相手、後に一葉が「桜木の宿」と呼ぶ家の隣の法真寺の子弟・法順か、などと云われもするが、その一葉は、生涯心に秘め忘れることのない恋の相手でもある桃水に導かれて、上野の帝国図書館で自ら近世文学を学び、晩年は特に西鶴の愛読者だった。そして又、堀口大学に、

八百屋お七が火をつけた

お小姓吉三に逢ひたさに

われとわが屋に火をつけた

あれは大事な気持です

忘れてならない気持です

（お七の火）

『たけくらべ』の中の「子どもたちの時間」

などと詩うたわれたお七の咄はなを、「八百屋お七の機関かんかん」(閣校上)などで知らない訳でもなかった一葉にとって、『源氏物語』柏木の巻にはないもかかわらず、中世・近世を通じてであると信じられた、

わりなきは情の道(理性・分別を超えてしまうのが、恋というものだ)

(好色五人女三の三)

といった言葉が、主題の一つでもある『好色五人女』の、しかも本郷を舞台にした巻四「恋草からげし八百屋物語」は、心に深く刻まれた物語にだつたに違いない。

のみならず、東明雅によってこの西鶴の作品は、

第二章で雷鳴の夜、お七が吉三郎の寝所に忍ぶ前後は、伊勢物語「狩の使」の段、或は「芥川」の段の面影が存する。

と云われ、挿絵に注目した日野龍夫は、この「吉三郎の寝所に忍んでゆく場面(第二節)」と、庭前の桜を見て物思いにふける場面(第四節)のお七は、

髪を長くたらしうぶかむ襦袢の上着を着て、高貴の姫君さながらであつて、とうてい八百屋の娘とは見えない。

と指摘し、その挿絵に注目し、本文も詳細に比較検討した信多純一は、『好色五人女』巻四は五章すべて、『伊勢物語』の初段から第五段まで、「順序を変えずにとり合わせて構想化した」作品であると、述べている。⁽²²⁾

改めて云うまでもなく、一葉は平田禿木に借りて、帝國文庫第二十四編・二十五編の『西鶴全集』上下巻(明治二十七年、五月・六月、博文館尾崎紅葉・渡部乙羽校訂)を読んでいた。『五人女』は上巻にあり、挿絵はない。だが、樋口に家に現存する蔵書の中の「伊勢物語(写)」の「写」の意味が、「読もうとする本を写しながら覚え、かつ書法も覚えていく」という古典学習法⁽¹⁵⁾を示すのであるなら、短いだけに『伊勢物語』は一葉にとって、『源氏物語』以上に熟知の作品だつたろう。

先ず美登利が、

解かば足もとあしもとくべき毛髪を、根あがりに堅くつめて前髪大きく鬢をもたげの、しんぐ緒熊といふ名は恐ろしけれど、此鬢を此頃の流行とて良家の令嬢も遊ばさるゝぞかし、

と髪型によつて紹介される、その傍点部分に注目してみよう。美登利に照応する若紫は十歳、正太の憧れの対象で十四歳にもなる美登利を、

若紫同様の「冠つ切り」の、即ち、扇のようにゆらくとゆるる肩までの「童女」の髪型で、登場させる訳にはいかないだろう。だが、その頃流行の「緒熊」という髪型に、傍点部分の説明を付け、「良家の令嬢も遊ばさる、ぞかし」と結ぶことで、美登利は『五人女』第一節に、
年も十六、花は上野の盛、月は隅田川のかげきよく、かゝる美女のあるべきものと都鳥、其業平に時代ちがいて見せぬ事の口惜、と紹介され、一葉は見て、いないと思うが（想像の世界は別である）、第二節・第四節の挿絵で、「髪を長くたらし」た「高貴の姫君さながら」のお七の姿に重なり、『たけくらべ』にふさわしい『伊勢物語』の世界に入ってゆく。

更に詳しく、信多純一の説に従い、『五人女』第一節の挿絵と文章に注目してみよう。この部分は、『伊勢物語』第一段によっている。先ず、「作者の命名とほぼ考えてよい」と云われる「若紫」の巻名は、この段の次の和歌、

春日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず

に由来するものだった。⁽²⁴⁾のみならず、「義姉妹」とされる「遊仙窟」の「美しい二人の仙女」に端を発し、『伊勢物語』の「女はらから」から、『源氏物語』若紫の段の若紫と祖母、そして橋姫の巻の大君と中君へと流れる「垣間見」の系譜が、『たけくらべ』で変質するものも、それはこの『五人女』のお七・吉三郎の恋を通過するからだと思われる。

『五人女』第一節のその部分を見てみよう。十二月二十八日の夜半の火事に類焼し、旦那寺に避難したお七が、ごった返す寺の縁側の障子を明け、寺小姓・吉三郎の指の刺を抜きかねる母親の姿を、挿絵によれば背後から垣間見ている。帝國文庫の本文は次のようである。

母人の珠敷袋をあけて、願の玉の手にかけ、口のうちにして題目いとまなき折から、やことなき若衆の銀の毛貫片手に、左の人さし指に有るかなさかのとげの立けるも心にかゝると、暮方の障子をひらき、身をなやみおほしけるを、母人見かね給ひ、ぬきまいらせんと、その毛貫を取て、暫なやみ給へども老眼のさだかならず、見付る事かたくて、氣毒なる有さまお七見しより、我なら目時の目にて抜かん物をもと思ひながら、近寄かねて、⁽²⁵⁾、母人呼び給ひて、是をぬきてまゐらせよとのよしうれし

と。この文章の点線部分は、「たけくらべ」の「今様の按察の後室が珠数を爪ぐつて」に、若衆は信如に、お七は美登利に、人差指のとげは切れた下駄の鼻緒に、そして「銀の毛貫」は「紅入り友仙」の「切れ端」に、またお七の母人は美登利の母の親に対応するだろう。

そして、吉三郎の手を取る可憐なお七の手は、「我をわすれ」た吉三郎に握りしめられ、お七は吉三郎に「はなれがたか」ったにもかかわ

『たけくらべ』の中の「子どもたちの時間」

らず、「母の見給ふをうたてく、是非もなく立別れ」るのである。更に、お七が吉三郎の寝間に忍んだ時も、長老様の視線を気にして、二人は共に恐れおのいている。

真如を背後から見つめる『たけくらべ』の美登利も、「母親の視線によって背後から射すくめられている」。前田愛はそれを次のように云っている。

すくなくとも信如がそうであつたように、美登利も母親のまなざしを背中に痛いほど感じている。信如の後姿を認めたときに美登利は、「人の見るかと背後の見られて、恐る／＼門の傍へ寄」るのであり、「母親の呼声しば／＼なるを佐し」く、身をひるがえすのである。

しかも、格子門のかげにかくれて様子をうかがう美登利を母親は背後から呼びたてる。「……此美登利さんは何を遊んで居る、雨の降るに表へ出ての悪戯は成りませぬ」。

と。

改めて云うまでもなく、お七・吉三郎が初めて出会う場面は、黄昏時の淡い光の中で、まるでその媒介になった「銀の毛貫」⁽²⁶⁾ながら、夢のように可憐で美しい。そしてその可憐な姿は、何不自由なく大事に育った箱入娘の、初恋に我を忘れたひたむきな一途さ故の大胆さを伴って、わずか十六才の女の身で、雨の夜の暗闇の中を只一人、雷も恐れず吉三郎を慕って忍んで行き、吉三郎を探し当てても、共に為す術もなく、たゞ／＼「せつなく」「涙をこぼ」す場面にも、あるいは又、家に戻って逢えなくなればなつたで、火事が縁で出逢つたことを思い出し、放火する程思いつめて捕えられ、「夢幻の中ぞと一ねんに佛國を願ひ」、「手向」られた「一本」の「櫻」のように、美事に潔く散って逝くお七の姿にも、見ることができ。この作品の随所に、「狩の使」や「芥川」の段などの語句や面影が散りばめられ、この物語全体が、『伊勢物語』第一段から第五段までの雛案でさえあるのも、この作品の作者・西鶴が、お七・吉三郎の恋を、若き日の業平同様の挫折も厭わない一途で純粋な美しいものと、考えたからだつたらう。⁽²⁷⁾

だが、西鶴のそんな作品をふまえ、『伊勢物語』の中でも、幼馴染の恋を成就させて、男の心変わりにも動じない女の愛の確かさを語る、筒井筒にちなむ名を書名にしながら、「たけくらべ」の美登利と真如は、その恋を成就させるところか、それが恋であることも、お互いがお互いに魅かれ合っていることも知らず、まともに顔を合わせることもすらないのである。雨の中で鼻緒を踏み切り、大風に傘までとられて、

「此処は大黒屋の」と思うと、動くこともできずただ「ぢれて、ぢれて」困惑する信如を、「障子の中」から「硝子ごし」に垣間見た「お侠」な美登利は、「紅入」の「友仙ちりめんの切れ端」をつかんで、飛び出したにもかかわらず、信如とわかると「うじくと胸」を「とどろか」せ、「物」も「いはず」それを投出すしかないのである。そして「飛石の足音」から「その人と思う」や、「わなくと顫へて顔の色も変」り、「見ぬやうに見て知らず顔」の真如に、

ゑ、例の通りの心根

と、「遣る瀬な」い「思ひを眼に集め」、こみ上げる涙を振り切つて、「しばく」呼び立てる「母親の声」に身をひる返し、「かたくと飛石を伝」つて去つて行く。淋しく見返る信如の足もとには、「紅入り友仙」が「雨にぬれて」、「そらろに床し」く、美しい「紅葉」のように見えたと云うのである。それは美登利にとつても信如にとつても、高子を背負つて、雨の中を逃げたにもかかわらず、鬼に食われてしまった業平のように、あるいは又、夢我夢中で近づいたにも限らず、時間だけが流れて、空しく帰らざるを得なかつた伊勢の斎宮のように、どうしようもなく切ない、「血の涙」のようなものだつたらうか。

七

そして十一月の大鳥神社の祭の日、「上天気」に恵まれて、その「賑ひ」は「懐まじく」、「笑ひ声のどよめき」、「沸き」返る「絃歌の声」も様々な「面白さ」の中に、「大鳥田」に結い、「極彩色」の「京人形を見るやう」な「奇麗」な美登利が現われる。だが、正太が「あつとも言はず立止り」、いつもの様に「抱きつき」もせず、「よく似合うね」「何故はやく見せては呉れなかつた」と、「恨めしげに」云つても、「私は嫌やでならない」と、往来の人の視線を避け、顔を赤らめて「うち萎れ」るばかりだつた。そして、

・憂く恥かしく、つゝまじきの身にあれば人のほめるは嘲りと聞なされて島田の鬻のなつかしさに振かへり見る人たちはば我れを蔑む目つきと取られて、

・何時までも何時までも人形と紙雛様とを相手にして飯事ばかりして居たらば嘸かし嬉しき事ならんを、ゑ、嫌や、大人に成るは嫌

『たけくらべ』の中の「子どもたちの時間」

やな事、何故此やうに年をば重る、もう七月十月、一年も以前へ戻りたい

と、「忍び音の涕」にくれる美登利に、「一体何があつたのだらう。それはこれまで云われてきた初潮や水揚げなどより、もつとずっと「憂く恥かしく」、「昨日の美登利」には思いも寄らない、そして人が聞けば「嘲り」「蔑む」ような「嫌や」で「嫌やでならない」ことだったに違いない。美登利に重なる若紫が、光源氏にひきとられて、「男君はとく起きたまひて、女君はさらに起きたまはぬ朝」(源氏物語・葵)のあつたことを、思い出してみよう。その時の若紫の衝撃は、

かかる御心をうらなく頼もしきものに思ひきこえけむ、とあさましう思さる
(同右)

四年の歳月を共に過ごした「後の親」と頼む人の突然の変貌への驚愕に因るところが大きい
と、原岡文字は述べている。⁽¹³⁾ 美登利にとって、親にも等しい、親以上の「後の親」のような人といえ、それは大黒屋の主だらう。一葉は繰り返すように記している。

①両親ありながら大目に見てあらし詞をかけたる事もなく、楼の主が大切がる様子も怪しきに、聞けば養女にもあらず、親戚にてはもとより無く、姉なる人が身売りの当時、鑑定に来たりし楼の主が誘ひにまかせ、此地に活計もとむとて親子三人が旅衣、たち出しは此訳、それより奥は何なれや、

②嘘ならば聞いて見よ、大黒屋に大巻の居ずば彼の楼は闇とかや、さればお店の旦那とても父さん母さん我身を疎略には遊ばさず、常々大切がりて床の間に据へなされし瀬戸物の大黒様をば、我れいつぞや座敷の中にて羽根つくとして騒ぎし時、同じく並びし花瓶を倒し、散々に破損をさせしに、旦那次の間に御酒めし上りながら、美どりはお転婆が過ぎるのと言はれし計小言は無かりき、他の人ならば一通りの怒りではあるまじと、女子衆にあとくまで羨まれしも必意は姉様の威光ぞかし、

③私の事を女郎、女郎と長吉づらに言はせるのもお前の指図、女郎でも宜いでは無いか、塵一本お前さんが世話には成らぬ、私には父さんもあり母さんもあり、大黒屋の旦那も姉さんもある、お前のやうな腥のお世話には能う成らぬほどに、余計な女郎呼はり置いて貰ひましょ、

と。①は美登利の真如に対する言葉だが、美登利が「衝撃」を受け、「驚愕」した「嫌や」で「嫌やでならないこと」は、この「楼の主」に深くかわっているに違いない。そしてそれが、「昨日の美登利」の「身」には「覚え」がなく、「大島田」も「姉さんの部屋で今朝ゆつて貰った」のであれば、それは、

大島神社の賑ひ懐まじく、此処をかこつけに検査場の門より乱れ入る若人達の勢ひとては天柱くだけ、地維かくるかと思はる、

と記される部分の「検査場」にかかわることだったのではなかるうか。この言葉は、「二ッ股野郎」の「罪」のない子、三五郎の境遇を述べた箇所でも、

夏は検査場の水屋が手伝ひして、

と記されている。というのも、西の市の期間中「日々掛の集め」は休ませて貰っている正太が、汁粉屋を訪れ、美登利の噂をしながら、

彼の子も華魁になるのでは可愛さうだ

とつぶやく場面で、その正太が、

十六七の頃までは蝶よ花よと育てられ

と「怪しきふるへ声」で、「此頃此所の流行ぶし」を口づさむ部分があり、新大系本の補注を見れば、

十六七になるまでも、てふよはなよと育てられ、今ではくるわへ身を売られ、月に三度の御規則で、……検査をされる其の時は、八千

八こゑのほと、ぎす、血を吐くよりも未だ難堪(むづかしい)、

などとあるからである。ここに紹介される大久保葩雪の『花街風俗志』(隆文館、明39)の中のこの「厄介節」の歌詞には、

十四の春から店に出て、

ともあることに注目すれば、美登利は十四歳、

・廓内の大卷さんよりも奇麗だと皆がいふよ、

・大卷さんより猶美しいや、

と正太に繰り返し云われる美登利が、大黒屋の主に待ちに待たれて、はや十四歳で、「店」に出ることも、ありえないことではないとすれば、

『たけくらべ』の中の「子どもたちの時間」

たとえば、

姉さま三年の馴染に銀行の川様、兜町の米様もあり、議員の短小さま根曳して奥様にと

などと、何も知らない美登利が、誇りにしたような上客に水揚げされる前に、それ相応のその「身」についての非情な吟味があったのではなからうか。そしてそれが美登利が、「嫌やでならない」「初々しい大島田」を、「姉さんの部屋で今朝ゆつて貰った」理由であり、全く経験のない母親が「あやし」「い」「笑顔」で、「少し経てば愈りませう」などと、のんきなことを言つて、「風呂場の湯かげん」など見る理由だと思われる。

美登利はそれ以後、生れ替つたように「柔順し」くなり、「用のある」時、「廓内の姉のもと」に通うだけで、「我身をわが身」とも思えず、ただもう「恥かし」とばかり思い込んで暮している。そんな冬の日の「霜」の美しい「朝」、「水仙の造り花を格子門の際よりさし入れ」た者があったと、作者は記している。そしてこの作品は、

誰れの処業と知る者なけれども、美登利は何故となくなつかしき思ひにて違ひ棚の一輪ざしにいれて淋しく清き姿と愛でけるが、聞くとも無しに伝え聞く其明けの日は信如が何がしの学林に袖の色かへぬべき当日成しとぞ。

と結ばれて終っている。

三五郎を介して、正太は信如のこの件について知っていた。美登利に「忍び音の涕」で暮らす「嫌やでならない」ことが起り、相手にされない正太が、「子供心に」訳もわからず動揺していた頃の事である。美登利は知らない。人目を避けて暮す美登利は、信如の「脩業」の「風説」も、「絶えて」聞かなかつたと記されている。

だが、「怪しが」って、「病ひの故かと危ぶむ」者もあり、「女らしく温順しく成つたと褒める」者もあれば、「折角の面白い子を台なしに為たと誹る」者のある程、噂になつた美登利の変化を、信如が知らなかつたとは思えない。信如は、大黒屋の寮の前で鼻緒を切つた時も、飛石を渡つてくる足音だけで、振り返らなくても、それが美登利だとわかつていた。一緒に祭の写真を撮ろうと、美登利にもちかけた時、正太が、

龍華寺の奴が羨ましがるやうに、本当だぜ彼奴は屹度怒るよ、真青に成つて怒るよ、

などと云っていること、また、信如が「坊さん学校」に「這入る」と聞いた時、

本の腕つこで一度龍華寺とやりたかったに、

と云っていることを見るなら、美登利に憧れる正太が、幼く賢いだけに、鋭く信如に感じ取っていたものが何であるか、明らかだろう。美登利が信如の為に使った「紅の絹」のはんかちや、「紅入り友仙」の「ちりめんの切れ端」のように、明かるく真っ直ぐで、住んでいる所も家族も誇りにし、したい事を「気ま、」にやっつてのける天真爛漫な美登利は、うじくくと煮え切らない信如にとって、まぶしい程美しい憧れの対象だったに違いない。にもかかわらず、「恨めし」い家族の中に育ち、勉強家で「発心は腹から」の信如は、そんな自分の気持を押しつぶし、「悉皆あやまり」のような場所から、必死に逃れようとする。

だが、僧侶への道がはつきりした時信如は、「淋しく清」らかな「水仙の造り花を格子門の際」に、「さし入れ」るのである。「片思い」が花言葉でもあるその清らかな花は、信如であると同時に、美登利でもあったろう。美登利は、「物いふ声の細く清し」い女の子だった。千束神社の祭の夕暮、「水色友仙の涼しげ」な「単衣」姿の彼女を、「我子ながら美しく」と見とれて、母親は「立ちて見、居て見」している。この傍点部分は、『五人女』巻四の四「世に見をさめの櫻」が下敷にする『伊勢物語』第四段によっている。そこには、「ほい（本意）にはあらで。心ざしふか、りける人」に引き離された昔男・業平の姿を、次のように語っていた。

又の年のむ月に梅の花盛に。こぞをこひて。いきて。立てみ。みて見。みれどこぞにるべくもあらず。うちなきて。あばらなる。いたしきに。月のかたぶくまでふせりて。こぞを思ひ出て。読る

月やあらぬ春や昔の春ならぬ

我身ひとつはもとのみにして

と。よみて夜のほのぐと明るになくく帰りにけり

と。そして『五人女』のこの章の挿絵は、「ゐて（坐って）見る」業平を、高貴な姫君ながら、長くたらしめた髪型のお七が、月ではなく桜を前に、去年の火事騒ぎで出会った吉三郎を想い、もの思いに耽って「ある」場面になっている。のみならず文中には、放火の罪で捕えられ処刑になるお七に、「最後」の覚悟を促すと、

『たけくらべ』の中の「子どもたちの時間」

心中更にたがはず、夢幻の中ぞと、一ねんに佛國を願ひける心ざし、去迎は痛しく、手向花とて咲おくれし櫻を一本もたせけるに、打詠めて、世の哀れ春吹く風に名を残しおくれ櫻のけふ散し身はと吟しけるを、聞人一しほにいたまはしく、

云々と記されていた。『たけくらべ』では、この「おくれ櫻」を、「水仙の造り花」に変えたのではなからうか。業平とは違い、

もう七月十月、一年も以前へ戻りたい

と、「我身ひとつはもとのみ」ではないことを嘆く美登利に、信如は、「初々し」く楚々と清らかな「水仙の造り花」を、送ったと云うのである。「造り花」即ち造花は、「仏前の飾り」でもあり、たとえば、生花の水仙は冬の季語であるにもかかわらず、『季引節用集』上(文政元年に、

「七月」の季語として「本願寺へ水仙献(まげ)る」とある

のは、「あるいは造化であろう」、などとも云われている。そしてまた、「水仙」は水辺に住む仙人・仙女の意だったとすれば、若紫にも重なる美登利は、『伊勢物語』第一段の「女はらから」の一人、のみならず、その「女はらから」には、『遊仙窟』の「神仙の窟」に住む「美しい二人の仙女」の面影があり、しかもこの二人が義姉妹であるなら、それはまた、仙境にも喜見城にもたとえられる遊廓、吉原に身をおく美登利と大巻にも重なるだろう。従って、信如が美登利に遺した「水仙の造り花」は、黄金の仏体にも等しい黄色、そしてその「造り花」は、散華の際の造花にも等しかったらうか。何ごとも「夢幻」の「ままにならぬ」この世に生まれて、美登利は大巻と共に、人の道を踏みはずしても生きなければならぬ老いた親を支え、果ては投げ込み寺に置き去りにされかねない吉原で、その短い命を終えるのかもしれない。だがだからといって、この一瞬の「夢幻」の世で、一見幸せそうに見える人の人生と、それがどれ程の違いがあるのかというのかわり、「大人しい」信如の美登利に対する、そしてまた、幼い頃から書くことにこだわり、『大つごもり』を発表した明治二十七年十二月から、『わかれ道』を発表する明治二十九年一月までの「奇跡の十四ヶ月」に、数々の名作を世に残して、借金で借金を返すという食うや食わずの貧しい生活の中で、時には妾になれとまで云われながら、妹・邦子と共に、老いた母・たきを守り、わずか二十四歳の若さで亡くなった一葉の読者に対する、メッセージだったのではなからうか。そして更に云えば、学問好きで強欲を嫌う信如と、明るく「やんちゃ」で「お俠」な美登利は、六歳で四書の素読をし、小学校(高等科)を首席で修了しながら、家事を重んじる母親の意見で、学問を断念させられた時、

「死ぬ斗」に悲しく、「夜ごと文机にむかふ事」をやめないばかりか、金銭を塵芥のように嫌い、親しんだ「草々紙」の中でも、特に「英雄豪傑の伝仁、俠義人の行為」を好んで、「凡て勇ましく花やか」なのが「嬉し」く、世に抜んでた者になりたいと願った、幼い頃の一葉の分身だったとも云えようか。『たけくらべ』はまさに、「父母弟妹」を思い、それ故にこそ俗文学の世界に甘んじ、「三才の童子」にも慕われたに違いない桃水を想いながら、父に死なれた我が身に戒名までつけて、

文学は糊口の為になすべき物ならず

(にっ記 明治廿六年七月)

と念じ、「明治の清少」とも「女西鶴」とも云われた(さをのしづく)一葉その人にふさわしい名作だった。

〈注〉

- (1) 前田愛『都市空間のなかの文学』(ちくま学芸文庫)
- (2) 『たけくらべ』の本文は、新日本古典文学大系明治編24『樋口一葉集』によっている。但し、振仮名は必ずしもつけていない。
- (3) 青木一男『たけくらべ研究』(教育出版センター)
- (4) 大野茂男『たけくらべ通釈』(國文社)
- (5) 井上ひさし「一葉の財産」(ちくま日本文学全集『樋口一葉』所収)。一葉の日記『しのぶぐさ』(明治二十八年一月)には、
となり酒うる家あり。女子あまた居て、客のときをする事うたひめのごとく、遊びめに似たり、つねに文かきて給はれとて、わがもとに来る。
ぬしはいつもかはりて、そのかずはかりがたし。
とある。
- (6) 新日本古典文学大系明治編24『樋口一葉集』脚注・補注など。
- (7) 『一葉の憶ひ出』(近代作家研究叢書42 日本図書センター)
- (8) 中央公論美術出版
- (9) この一字、ちくま日本文学全集『樋口一葉』と対校の上、筆者が補った。
- (10) 国語学会編『国語学大辞典』(東京堂出版)
- (11) 田町は大門に近く、都市化のきつかけを作っていた非常門の閉鎖で、損害を受けた千束村や龍泉寺村とは違い、逆に利益を得た地域の一つだった(中西亮大「閉ざされた門―『たけくらべ』冒頭を読む―」『論集樋口一葉』Ⅲ おうふう)
- (12) 『晩年の子供』(講談社) 所収
- (13) 原岡文子『源氏物語』に仕掛けられた謎 「若紫」からのメッセージ(角川学芸出版)

『たけくらべ』の中の「子どもたちの時間」

- (14) 松原秀江「江戸時代における女性の文学的教養について―狭義の頭書形式の版本を中心に―」(『薄雪物語と御伽草子・仮名草子』 和泉書店)
- (15) 青木一男『一葉論攷―立志の家系・樋口奈津から作家一葉へ―』(おうふう)
- (16) 『鷗外全集』第二十三卷(岩波書店)
- (17) 荒木慶胤『樋口一葉と龍泉寺界限』(八木書店)の中の野口碩の「序にかえて」、及び「樋口一葉年譜」による。
- (18) 和田芳恵『樋口一葉』(講談社現代新書)。但し、信如のモデルは、下谷龍泉寺町五十二番地(当時)の大音寺の子息、加藤正道との説もある(荒木慶胤『樋口一葉と龍泉寺界限』八木書店)など。
- (19) 『堀口大学全集』1(小澤書店)、「雪国にて」所収。
- (20) 岩波文庫『好色五人女』解説。
- (21) 『江戸人とユートピア』(朝日新聞社)
- (22) 「古典と西鶴―『好色五人女』巻四をめぐる―」(『文学』昭53・8)。
- (23) 『五人女』の本文は、『帝國文庫』本によっている。
- (24) 玉上琢彌『源氏物語評釈』二(角川書店)
- (25) 「遊仙窟」は、『帝國文庫』第二十四編『西鶴全集』上巻にある『好色一代女』の一、「老女の隠れ家」にも影響を与えている。
- (26) 暉峻康隆『西鶴 評論と研究』(中央公論社)などに指摘されている。
- (27) 松原秀江『好色五人女』論―思い込み、あるいは思い違いの恋について―(『姫路短期大学研究報告第33号』)
- (28) 前田愛も「子どもたちの時間」の中で、藤沢衛彦の『明治流行歌史』から「復原」したものと、同様の歌詞を記している。
- (29) 伊宮伶『花ことばと神話・伝説』(新典社)
- (30) 一葉は同じ「さをのしづく」の中で、紫式部と清少納言を比較して、不遇な定子に仕え、晩年落魄の境遇に陥ったと伝えられる清少納言を、式部は天つちのいとしこにて少納言は霜ふる野邊にすて子の身の上成へしと、「はかなき」「女」の身で、父・則義に死なれ、何事も思うにまかせぬ浮(憂)世に、捨てられたも同然だった我が身にたとえている。因に、若紫は父ならぬ母のない子だった。そしてそれは平安時代、経済的な支えのないことを意味する。

〔附記〕 本稿は、大手前大学総合文化学部・文学入門の授業がきっかけになりました。熱心に受講してくれた学生の皆さんに、心からお礼申します。ありがとうございます。